**「ラーマクリシュナの福音」勉強会　第３０回　（２０１７年　０１月１７日）**

**・第３０回の勉強範囲：「第一章　師と弟子」７頁8頁**

・📖 （読む）「師と弟子」　７頁下段Ｌ１１～７頁下段Ｌ２１

***このたびは、自分のエゴが完全に砕かれたことをMは感じた。いまはこう思った、「そうだ。彼のおっしゃることは真理だ。私に他者を教えるなんの資格があろう。私は神を知っているか。私は真に神を愛しているか。『自分の寝床にゆとりもないのに、いっしょに寝ようと友を招く』だ。私は神について何も知らない。それなのに人を教えようとしている。なんということだ！　私はなんという馬鹿者だ！　これは他人に教えることのできる数学や歴史や文学ではない。いや、これは神の深い神秘なのだ。ほんとうに彼の言われるとおりだ」***

***これはMの、師との最初の議論であり、そして幸いにも最後の議論であった。***

（解説）

科学などのふつうの学問は自分で勉強をして、人に教えることができます。それで充分です。しかし神は違います。ふつうの勉強をしても神のことは理解できないです。神を理解するためには、別のやり方があります。それをしないで神のことを教えると間違いがいっぱい出ます。

例えば『福音』の中で、ある有名なブラーフモー・サマージという宗教の先生が、

「神はドライである。あなた方の愛と信仰によってをスウィートにせよ」と教えました。☞（『福音』２８１頁上段Ｌ１８参照）

シュリー・ラーマクリシュナは、「その言葉はとても変だ」と言いました。なぜなら、

**すべての愛、すべての面白さ、すべての美しさの源は神様**だからです。

だから「神様は面白くない」と言う人は、全然神様のことを知らないです。その人はもちろん聖典を勉強していますが、それだけです。神様がどれくらい至福なもので、素晴らしく、面白いか分からないのです。分からないから神について間違えたことを教えています。それでシュリー・ラーマクリシュナは『福音』の中で言いました。

*ある男があるとき、『私の伯父さんの牛小屋にはウマがたくさんいる』と言った。それをきいただけで、この男はウマなどは持っていないことが分かった。牛小屋にウマを飼う者はいないからだ*。　　　　　　　☞（『福音』２８１頁下段Ｌ１～Ｌ３参照）

「牛小屋にウマがいっぱい」は矛盾ですね。それと同じように、

「神はドライである。あなた方の愛と信仰によってをスウィートにせよ」というのは、神様についての矛盾です。変です。それを言った先生は聖典をいっぱい勉強していますが、神様は悟っていません。間違いを教える可能性があります。

**Mさんの理解**

・シュリー・ラーマクリシュナはMさんに言いました。

最初に、あなたは悟ってください

Mさんは自分にとってまず大事なことは、自分が悟ることだと理解できました。

我々の問題は、エゴがいっぱいですから、自分が知らなくても他の人に教えたい。神のことを知らなくても神のことを人に教えたい、と思うことです。

・シュリー・ラーマクリシュナはMさんに言いました。

あなたは土の像が神様ではないと批判しています。しかしひとつの方法ではさまざまな人の好みや力に合わせられない。それでは前に進めない。そのためにいろいろな方法があります。そしてそれは神様が準備されました。

Mさんはタクールのおっしゃることが正しいと理解しました。

これがMさんとタクールとの最初で最後の議論になりました。　あとでMさんは分からないことは質問しましたが、それは議論ではありません。

・📖 （読む）「師と弟子」　７頁下段Ｌ２２～８頁上段Ｌ１０

***師「お前は、土の像を拝むということを言っていた。たとえ神像は土でできていても、そのような種類の礼拝が必要なのである。神御自身が礼拝のさまざまの形を与えてくださったのである。宇宙のであられるが、知識のさまざまの段階にあるさまざまの人のために、これらすべての形を用意してくださったのである。***

***母親はさまざまの子供の胃袋に合うようにさまざまの料理をつくるだろう。五人の子供がいるとする。ここに一尾の魚があれば、彼女はそれでさまざまの料理をつくる。ピラフとか、漬物とかフライとかいうように、彼らの好みと消化力に合わせて―私の言うことが分かるか」***

**M（へりくだって）「はい、分かります。師よ、どのようにして神に心を集中したらよろしいでしょうか」**

（解説）

オリジナルでは「はい、わかりました」だけです。（へりくだって）はありません。

**シンボルを使って認識する**

今、とても大事なことがあります。

ヒンドゥ教徒は土の像、木の像、メタルで作った像などを礼拝します。他の宗教の人は「ヒンドゥ教徒は人形を礼拝する」と言うことがありますね。

しかし、仏教では寺院の仏堂にお釈迦様の像があります。

キリスト教もマリア様、イエスの像があります。

イスラム教は礼拝のためには何も像を使っていません。ですが例えば、自分や家族の写真を持っていると思います。写真はですね。その紙を見て「これは私のお母さん、お父さん」と言います。本当は紙なのにどうしてお母さん、お父さんと言っていますか？

なぜなら私たちは絶対に**シンボルを使わないと何も認識できない**からです。

本当は「神様は意識」と言ってもイメージが全然出ないでしょ。「意識を瞑想してください」と言われてもふつうの人はできない。もちろんだんだんと進むと、できるようになる。

どうしてふつうの人はできないですか？　なぜなら

**心は形がないものに集中できない**、**心が集中するすべての対象には形がある**

からです。心は、とても精妙なものやことがらを考えることができません。ずっと後でいっぱいトレーニングしてからできるようになりますが、最初は無理です。

それでヒンドゥ教徒は像を作ったほうがいいと考えました。もちろん、「神は純粋な意識、ブラフマン」だということを知っています。

だからヒンドゥ教はsuperstition（迷信）ではないです。本当は論理的です。

まず、最初は像にフォーカスしてください。なぜなら最初は「神様が好き」、「神様のことを考えたい」と思っても、像、シンボルがないと何もできない。心が何も考えられない、進むことができないからです。

シンボルを使う理由は二つです。

ひとつは、神様を集中して考える力が弱いことです。アディカーリの問題です。

もうひとつは、ルチ（好み）が人によってさまざまだからです。

今、ルチとアディカーリについて詳しく説明します。

**Ruchi ルチ　好み**

ルチは、taste(好み）、aptitude（適性）。人には好きなものがあります。例えば、私はお母さんの姿の神様が好きです。タクールはマザー・カーリーが好きでしたね。別の人、キリスト教徒はお父さんのイメージが好きです。ベビー・クリシュナなどの赤ちゃんのイメージが好きな人もいます。神様を好きになったり考えるのに、ひとつの種類、方法だけではない。

デパートの女性の靴売り場を見て、私はびっくりしました。たくさんの種類の靴があります。デザイン、色、飾り、いっぱいです。なぜなら皆さん好みがありますから。

レストランがたくさんあるのも、皆さんそれぞれ食べものの好みが違うからですね。

ヒンドゥ教の聖者たちは人によって好みが異なることをよく知っているので、たくさんの種類を準備しました。**本当は神様が準備したのですね。**

ヒンドゥ教では**神様の種類がいっぱい、悟りの方法がいっぱい、実践の種類がいっぱい**

あります。ギャーナ・ヨーガ、カルマ・ヨーガなど。ヒンドゥ教は素晴らしいです。

他の宗教の人の考えは、ヒンドゥ教と比較すると、大体同じパターンであまりいろいろな種類はありません。彼らは靴や食事に関しては、「それぞれ好みがあるのでたくさんの種類が必要だ」ということを理解していますが、宗教については理解していません。彼らは「宗教では悟りの道や神様はひとつ」であることが必要だと考えています。それで「ヒンドゥ教徒はどうしてそんなにたくさんの神様を礼拝しているのですか」と言うことがあるのですね。

**Adhikari アディカーリ　自分がもっている能力**

アディカーリは、自分は何がどれくらいできるか、自分の持っている能力です。

例えば、ラージャ・ヨーガを実践しようと思うと、一日に８時間くらい瞑想しないといけないです。しかし５分瞑想しただけで居眠りをしてしまう人が、いくらラージャ・ヨーガを実践したくてもそれは無理です。

また、ギャーナ・ヨーガの一番大事な実践は「私は魂、純粋な意識です」です。それなのに、体意識が強いとラージャ・ヨーガの実践は無理ですね。矛盾がいっぱい出ます。実践したいという希望があっても、先に進めない。ラージャ・ヨーガやギャーナ・ヨーガをしたくても、アディカーリがない、力がないですから。その時はしない方がいい。

（力の弱い存在としての赤ちゃんの例）

例えば、お母さんは赤ちゃんに最初にミルクを飲ませます。それから少し進んでおかゆを食べさせます。赤ちゃんは肉や魚を消化できないです。肉や魚は力が出る食べ物ですが、消化力のない赤ちゃんに強引に食べさせると、赤ちゃんは亡くなってしまいますね。そのために赤ちゃんの消化の力に合わせないといけない。

それと同じように、「私は神様を愛したい」と思って、突然「神様の意識」を瞑想しても何も分からないです。意識の瞑想をしてもdarkness（暗さ）しか見えません。

なぜなら心の準備ができていないからです。それが問題です。

（形のある神からジョーティへ）

マザー・カーリーには１０本の手があります。そのあとナーラーヤナ神には４本の手があります。そのあとは、ゴパール（ベビー・クリシュナ）は手が２本。だんだん減っていますでしょ。最終的にはジョーティ、明るいもの、光だけ。その感じで進みます。

最初、神様のことを集中して考える力はとても弱いですが、だんだんと進んでいくと、光などのように形のないものに集中することができるようになります。

先ほど、体意識が強いとギャーナ・ヨーガの実践はできないと言いましたが、逆のこともあります。体意識がそんなになくてギャーナ・ヨーガの実践ができる人でも、ギャーナ・ヨーガはあまり好きではない。バクティ・ヨーガが好き。その人はギャーナ・ヨーガもバクティ・ヨーガもできる。両方アディカーリがある。そのとき、もしバクティが好きなら、バクティ・ヨーガを選んでください。

ほとんどのみなさんのために、バクティ・ヨーガがいいです。バクティ・ヨーガとカルマ・ヨーガを合わせた方がいい。

その実践のためにはグルが必要です。

グルが「あなたにとって何が一番いいか」、「何がより大事か」を助言されます。

瞑想、バクティ、カルマ、識別、どれをもっと強調して実践すべきかを助言されます。

目的は、その人が神様を愛するように進ませてあげることです。

（『福音』勉強会第３０回、以上）